

活動

地球研は大学共同利用機関としてさまざまな活動を行っています。

共同研究

各大学、各省庁、地方公共団体（公的機関）、民間の研究機関、海外の研究機関と連携を図っています。海外の研究者との連携を密にするため、招へい外国人研究員として各国から多数の著名な研究者を招いています。

研究成果の発信

国内外の学術コミュニティを対象とした「地球研国際シンポジウム」、地球環境問題について幅広い提起を行う「地球研フォーラム」、研究成果を分かりやすく一般市民に紹介する「地球研市民セミナー」、地域の人々と活発な議論を行う「地球研地域連携セミナー」などを実施しています。

刊行物

地球研の成果を分かりやすく紹介する「地球研叢書」、地球研の研究者らが研究成果を広く紹介する「地球研ライブラリー」のほか、研究者の活動内容などを隔月で発信する「地球研ニュース」などを刊行しています。



地球環境学事典
地球研の10年間の研究成果を反映させました

2011年度 地球研の主なイベント

- 地球研市民セミナー 年8回程度開催
- 第9回地球研地域連携セミナー
「ユーラシアへのまなざし：ソ連崩壊20年後の環境問題」
2011年6月12日(日) 於：北海道大学学術交流会館小講堂
(北海道大学と共催)
- 第10回地球研フォーラム
「足もとの水を見つめなおす」
2011年7月10日(日)
於：国立京都国際会館
- 第6回地球研国際シンポジウム
「人間社会の未来可能性 Beyond Collapse」(仮)
2011年10月26日(水)-28日(金) 於：地球研講演室
- 人間文化研究機構第16回公開講演会・シンポジウム



地球研フォーラムの様子

Photo JASHENKO Roman



地下鉄烏丸線/京都駅→(20分)→国際会館駅→バス②乗り場→京都バス40系統「京都産業大学ゆき」または50系統「市原ゆき」(6分)→地球研前下車すぐ

京阪沿線/出町柳駅→叡山電鉄鞍馬線(20分)→二軒茶屋駅→(徒歩10分)→地球研

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

総合地球環境学研究所

〒603-8047 京都市北区上賀茂本山457番地4

TEL. 075-707-2100(代) FAX. 075-707-2106

http://www.chikyu.ac.jp 地球研



検索



総合地球環境学研究所
所長 立本 成文

いわゆる地球環境問題の根源は人間の文化にあります。この視点から、人間と自然との相互作用のあり方を根本から捉え直すとしているのが総合地球環境学研究所(地球研;RIHN)です。人間生活の豊かさが増すにつれて深刻になってきている環境問題を、地球的視野で総合的に研究し、未来可能性のある社会を構築するのに寄与することを目的としています。

研究プロジェクト方式を特色とする地球研は、十数個に及ぶ本研究(FR)に加えて準備段階のプレリサーチ(PR)や予備研究(FS)、インキュベーション研究(IS)が多々あります。

今年、地球研は2001年の創設から10年が経ちました。これを機にさらなる飛躍をいたしたいと決意しています。ご支援のほどお願いいたします。

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

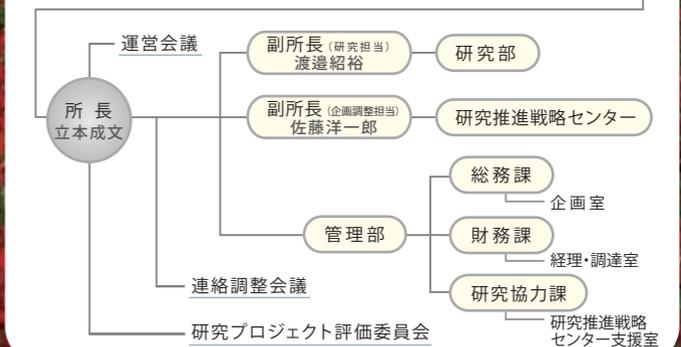
総合地球環境学研究所

2011



組織図

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 (2011年4月1日現在)



研究プロジェクト

地球研では、人間と自然との相互作用環を明らかにする研究をさまざまな領域について進めています。研究領域として、循環、多様性、資源、文明環境史および地球地域学の5つの領域プログラムを設定し、それぞれのプログラムのもとに多様なテーマを掲げた研究プロジェクトを推進しています。

(2011年4月1日現在)

循環領域プログラム (プログラム主幹：中野孝教)



主なフィールド：琵琶湖（日本）、アーハイ（中国雲南省大理市）

病原生物と人間の相互作用環

C-06 本研究 5 年目 プロジェクトリーダー：川端善一郎

近年の新たな感染症の拡大は、直接的あるいは間接的に人間生活の脅威となっています。本プロジェクトでは、『人間による環境改変—感染症の発生・拡大—人間生活の変化』の相互作用環を明らかにすることを目的としています。プロジェクトの成果を踏まえて、感染症の発生と拡大を防ぐ環境と、人間と病原生物との共存の在り方を提案することを目指します。

温暖化するシベリアの自然と人

—水環境をはじめとする陸域生態系変化への社会の適応

C-07 本研究 3 年目 プロジェクトリーダー：楡山哲哉

シベリアは温暖化が最も顕著に現れると予測される北半球高緯度にあります。シベリアの温暖化は、降水量の変化、融雪時期や規模、河川・湖沼の凍結融解時期の変化、永久凍土の融解など、水循環や雪氷環境に影響します。その結果、洪水の頻度や規模、湖沼の拡大・縮小、森林土壌の湿潤化や乾燥化の変動幅が大きくなり、住宅や農地のみならず、トナカイ牛馬飼育や野生動物の狩猟・漁労など、地域の人々の生業に大きな影響を与えます。人々がどの様に適応しているのか、どの辺りに被害の閾値があるのかなど、現地調査に基づいた研究を進めています。



主なフィールド：ロシアサハ共和国、レナ川流域



主なフィールド：開発途上国のメガシティ、特にインドネシアのジャカルタ

メガシティが地球環境に及ぼすインパクト

—そのメカニズム説明と未来可能性に向けた都市圏モデルの提案

C-08 本研究 2 年目 プロジェクトリーダー：村松 伸

地球上の人口の半分を支える都市は、人類の今後の生きる最も重要な空間です。本プロジェクトは、この都市と地球環境とが調和する方法を導きだすため、人口 1000 万人以上のメガ都市に関して 1) 異なる学問領域、歴史、文化などからメガ都市を統合的に認識する手法の確立、2) 問題低減に向かう統合的解決策の提示、3) 環境、経済、社会の豊かさを統合した都市のあるべき姿の提示を目標としています。

基幹研究プロジェクト 風水土イニシアティブ



主なフィールド：トルコ、エジプト、インドネシア、中国、琵琶湖湖東地域（日本）

統合的水資源管理のための「水土の知」を設える

C-09-Int 本研究 1 年目 プロジェクトリーダー：渡邊紹裕

第 1 期の資源管理や流域管理に関する複数のプロジェクトの成果を踏まえ、地域レベルの水管理のあり方を提示します。世界のさまざまな水文や水利の地域において、水管理の《功罪》とあるべき姿を、農業生産性、水収支と水質・水環境、制度と組織、利水の行動と意識などの観点について、歴史的な評価を含めて総合的に調査研究します。成果は、人類生存のための「知」としてまとめ、地域レベル水管理システムの基本条件や整備のガイドラインとして発信します。

多様性領域プログラム (プログラム主幹：川端善一郎)



主なフィールド：ヒマラヤ・チベット（インド・ラダーク、アルナーチャル、中国・青海省、ブータン）および他の高地との比較

人の生老病死と高所環境

—「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応

D-03 本研究 4 年目 プロジェクトリーダー：奥宮清人

高地で人はいかに生き生活しているのか（生老病死）、地球規模で進行する高齢化とそれに伴う生活習慣病を「身体に刻み込まれた地球環境問題」として焦点をあてます。高所環境に対する人間の医学生理的適応と「高地文明」とも呼ぶべき生態・文化的適応を明らかにし、近年の生活様式の変化がいかに高所住民の Quality of life(QoL) に影響を及ぼしているかを明らかにすることにより、地球環境問題にむけた高所からこそモデルや智恵を提示します。

人間活動下の生態系ネットワークの崩壊と再生

D-04 本研究 4 年目 プロジェクトリーダー：山村則男

現在、地球上のあらゆる生態系が人間活動により危機に瀕しています。従来の研究では直接的な影響だけが評価され、生態系ネットワークを介した生態系の崩壊や劣化は十分に扱われていませんでした。わたしたちは、生態系ネットワークの視点を環境問題に活かし、より健全な生態系への再生とその維持への道筋をつけることを目指しています。



主なフィールド：東南アジア熱帯林（マレーシア・サラワク）と中央アジア草原（モンゴル）

文明環境史領域プログラム (プログラム主幹：谷口真人)



主なフィールド：インド亜大陸の西北部、パキスタン（シンド州・パンジャーブ州からインドのハリヤーナ州、ラージャスターン州、グジャラート州にかけて広がるインダス文明地域）

環境変化とインダス文明

H-03 本研究 5 年目 プロジェクトリーダー：長田俊樹

人類は誕生以来、自然環境と対峙しまたは折り合いをつけながら、持続的な食糧供給を可能とする生存空間をうみだしてきました。四大文明の一つであるインダス文明（紀元前 2600 年—1900 年）は、インダス印章 / 文字、城塞、下水道施設などで知られており、その遺跡はインダス川流域だけではなく、インド西部など 68 万 km² にわたり広く分布しています。しかしこの文明は同時期の他の古代文明と異なり、都市文明期が約 700 年しか続きませんでした。われわれは、環境変化を中心にインダス文明が短期間で衰退した原因を解明し、長期的な環境変化が文明に及ぼす影響をあきらかにすることにより、現代の環境問題の解決を目指します。

東アジア内海の新石器化と現代化：景観の形成史

H-04 本研究 5 年目 プロジェクトリーダー：内山純蔵

現代の景観の歴史的背景を復元・理解しつつ、文化的景観と文化多様性の保護の指針づくりに向けて活動しています。東アジア内海（日本海と東シナ海）の沿岸を対象に、人間・自然関係の中でも大きな変革が起こった新石器化と現代化の時期に注目します。沿岸諸地域の景観がどのように形成され、どのような方向に向かおうとしているのか、人間文化の側面に焦点をあてながら解明します。



主なフィールド：東アジア内海（日本海沿岸と東シナ海沿岸）

資源領域プログラム (プログラム主幹：門司和彦)



主なフィールド：中央ユーラシア半乾燥地のカザフスタン、中国にまたがるイリ河およびその周辺地域

民族 / 国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明—中央ユーラシア半乾燥地域の変遷

R-03 本研究 5 年目 プロジェクトリーダー：窪田順平

中央ユーラシア半乾燥地域は遊牧とオアシス農業とが共生する世界でしたが、民族 / 国家の興亡の時代を経て、遊牧民の定住化と農耕へと生業の大変化が起きました。その後の大規模な開発により現代的な環境問題も顕在化します。人間と環境の相互作用の歴史の変遷を、背景に存在する国境、民族、生業（農業と遊牧）などの問題に着目し、未来可能性を探ります。

熱帯アジアの環境変化と感染症

R-04 本研究 4 年目 プロジェクトリーダー：門司和彦

本プロジェクト (The RHN Ecohealth Project) は、ラオス・バングラデシュ・ベトナム・雲南等での環境変化と人びとの生活変化が、マラリアや肝吸虫などの風土病的感染症や人びとの健康プロフィール全体に及ぼす影響を、「エコヘルス」として一体的・分野横断的に記載・分析し、熱帯モンスーンアジア地域の環境と人びとの生活と健康の将来のあり方を考えていきます。



主なフィールド：熱帯モンスーンアジア（ラオス・バングラデシュ・雲南）



アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて

R-05 本研究 3 年目 プロジェクトリーダー：縄田浩志

中東の乾燥地域において、千年以上にわたり生き残り続けることができたアラブ社会の生命維持機構と自給自足的な生産活動の特質を明らかにし、ポスト石油時代に向けた、地域住民の生活基盤再構築のための学術的枠組みを提示することを目指します。

主なフィールド：スーダン半乾燥地域、エジプト・シナイ半島、アルジェリア・サハラ沙漠、サウディ・アラビア紅海沿岸

東南アジアにおける持続可能な食料供給と健康リスク管理の流域設計

R-06 本研究 1 年目 プロジェクトリーダー：嘉田良平

異常気象、人口増加、都市化の進展、土地改変などの過程で生じているさまざまな環境・生態的变化と食のリスクとの関係性に注目し、集水域を単位とするリスク管理の構築を目指します。特に都市化と人口集中が著しいフィリピン・ラグナ湖周辺地域を調査対象として、化学的・物理的・生物学的な諸側面にまたがる生態リスクの実態と影響、人々の食生活の変化や健康面に及ぼす影響の解明を試みます。



主なフィールド：フィリピン・ラグナ湖周辺地域

地球地域学領域プログラム (プログラム主幹：湯本貴和)



主なフィールド：ザンビアを中心とした半乾燥熱帯地域の農村社会

社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス

E-04 本研究 5 年目 プロジェクトリーダー：梅津千恵子

世界の貧困人口の大部分が集中するサブサハラ・アフリカや南アジアの半乾燥熱帯では、天水農業に依存する人々の生活は環境変動に対して脆弱であり、植生や土壌などの環境資源は人間活動に対して脆弱です。これらを解決するには、人間社会および生態系が環境変動の影響から速やかに回復すること（レジリエンス）が鍵となります。われわれは途上国の農村地域において環境変動に対する社会・生態システムのレジリエンスを探り、方策を考えます。

研究推進戦略センター (CCPC)

研究推進戦略センター (CCPC: Center for Coordination, Promotion and Communication) は、研究プロジェクトやプログラムの枠を超えた研究所全体にかかわる調査、研究、支援などの中核的な活動を担っています。



施設

研究者同士の交流を図る開放的な研究室

地球研にある研究室は、なだらかに弧を描いた全長 150m の大空間にすべての研究プロジェクトが有機的な連携をもつよう開放的に設計されています。建物のほぼ中央には、研究者が共通に利用する図書室や情報処理室を配置するとともに、日常的な議論を行うためにサロンのような空間も準備されています。また、地階には、機能に応じた実験室が設置され、研究室と同様、共同利用における利便性と連携性を重視した設計となっています。



研究室

多様な研究に応える 18 の実験室



多目的実験室 1

病原生物を対象にした実験などを行っています

また、安定同位体や DNA などの分析装置をはじめとする共通機器などが整備されており、プロジェクト研究に利用されています。